

救せない人を救す

別居した夫の最期を看取った 田辺 政子さん

(愛知県蒲郡市 蒲郡バプテスト教会)

政子さんは、蒲郡市三谷（みや）町の職場で出会った田辺勝（まさる）さんと1959年に結婚。農家で、十人という大家族の一員となった。まもなく勝さんは、両親の反対を押して鶏小屋を少し改築し、織物工場を始めた。織物の景気が良い頃だった。

心の休まらない家庭

政子さん夫妻が同居し生活環境が変化したこともあってか、家の中がだんだんギクシャクして来た。両親はけんかをくり返すようになり、激しくののしり合い、舅は姑に対して暴力をふるうようになった。

舅は外に女性をつくって子どもまで生まれ、姑がその子の面倒をみることであった。よほどの苦しさを我慢していたのだろう。姑

と言われていましたが、本当にそうだなと思います」

政子さんは、夜もおちおち寝ていられないような異常な家からは出たほうがいいと本気で思い、娘たちも大きくなって来たので、意

を決してアパートを借り、三人を連れて出た。まず政子さんが働き、次女、長女と働き始めた。美千代さんは、まだ中一だった。それらが、母娘の本当の幸せな日々だった。



右から 三女的美千代さん、田辺政子さん、美千代さんの夫の依田忠克さん
後ろに立つのが、蒲郡バプテスト教会の浅田朗牧師夫妻

「主は…私を滅びの穴から、泥沼から、引き上げて下さった。そして私の足を巖の上に置き、私の歩みを確かにされた」(詩篇40章1～2節)

政子さんは初めから、「自分が求めていたものは、これなんだな」と思った。聖書を読むと他では得られない平安をいただくからだ。三女的美千代さんは言う。

「父に対しては、長いこと『この人のせいで、私の人生はこうなった』という気持ちでした。お父さんから何々してもらったという友達の家のような思い出が、私にはないのです。姉について教会に行くようになり、小学校4年生の時にイエス様を信じました。父から受けられなかった愛を、神さまからいただきました」。

母からは、『私たちは神さまから離れたら、生きていけないよ。貧しくても、食べるもの、着るもの、住む所がなくて困ったことがないのは、誰がそうして下さったか』と思っ

か帰って来ている。夫は、すでに織物工場はたたみ、会社勤めをしていましたから、両親の家を出てさえくればよかったのですが、夫は取り合ってくれませんでした。本音を言えば、『こんな夫は、交通事故か何かで、早く死んでくれれば』とさえ思いました」

夫は、自分の親や妹にはお小遣いをあげるのに、妻には給料さえくれない、ボーナスをもらっても全然渡さない。そんな中で政子さんが生き延びただけでも奇跡だ。今考えれば、政子さんはうつになっていたとしても不思議はない。

娘が教会へ

そのような折、中学生の長女美恵子さんが近所の婦人から、「蒲郡の教会で宣教師の先生が、英語をタダで教えてくれる」と聞いてきた。英語の好きな美恵子さんは、次の日曜日から出かけて行き、そのうちに次女の奈保美さんと三女的美千代さんもついて行った。楽しそうに帰って来るので、政